
ユーザネイシア 【しあわせの形】

十六夜 あやめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【ヨーサネイシア】 【しあわせの形】

【著者名】

【N2】

【N2364BA】

【作者名】

【十六夜 あやめ】

【あらすじ】

ある男の子目線で語られる、偶然出会った女の子（小夜）の恋物語。

【語】

【出会い・初恋・別れ】

【しあわせの形】はきっと人の数だけあると思つ。

小夜に出会えて、話すことができて本当に幸せだった。

(前書き)

云われば幸いです。

えっと…………覚えてる?

学校裏の坂道を上ったところにある見晴らしのいい場所のこと。僕が引っ越して来た時に散策していたら偶然辿り着いてさ、ちょうどそこに小夜さよがそよ風に吹かれながら座っていたんだよ。両足を宙に放り出して上下させていてさ、左右に頭を揺らしながら鼻歌を歌っているものだから、声を掛けようか掛けないか迷っちゃって。そうしたら急に振り向いたから驚いたよ。

夕陽に照らされた長い髪がまるで、無数の宝石が流れる川みたいに見えて綺麗うつくだったな。

目をまん丸にしてじっと僕を見ていたからさ、どうにも動けなかつたんだよね。動いたり声を出したりしたら、きっと慌てて落ちていたのかもしれない。あそこって塀も柵も無いから危ないよね。

あの場所ってさ、小夜の心の安らぎ場だつたって聞いたよ。嫌なことがあつた時とか迷いがある時に、よくあそこへ来て鼻歌を歌つていたつて。眠れない日も家族の人を起こさないよう家を抜け出して来ては、ぽつぽつと灯る家の明かりを数えていたんだつてね。小夜のお母さんもお父さんも全部知っていたみたい。

じつはね、僕も同じなんだよ。

引っ越してきたばかりでなかなか馴染めずにしてさ、学校とか嫌になつてよく帰りに来ていたんだよ。進路を考える時も親に相談する前にあそこへ行つていたんだ。なんだか落ち着くんだよね。あの場所から見る町とか人と鳥の声とか木々の音とか空の色とか。それらを見たり聴いたりしているとね、嫌なことも悩みも迷いなんかも綺麗さっぱり忘れちゃうんだ。

ただ、僕が行くときに限つて小夜はいなかつたな。

あのときは小夜が来るんじゃないかつてずっと待つてたんだ。でもやつぱり来なくてさ、ひとつひとつ明かりが消えていくのを一人で眺めていたよ。そして朝まで膝を抱えながら、日が昇るのを何も考えずに見ていたんだ……。

あさぢや朝靄が町を飲み込んでいく姿は感動したよ。まるで雲海のような景色で、それが日の光によつて徐々に消えていくのがとても優くて綺麗だつた。

ずっと都会に住んでいた僕は、背の高いコンクリートでできたビルやガラス張りの建物が当たり前だと思っていたけれど、この町に来て僕は馬鹿だつて思い知らされた。

この町で本当の意味の綺麗を知ることができて幸せだつた。

そしてね

小夜

小夜みたいな女の子に出会えたことにも感謝してるんだ。

きつとあの場所にあの時、小夜がいなかつたら僕はあそこへもう一度足を運んだりなんてしなかつたと思う。僕はね、楽しそうに鼻歌を歌つていた小夜に一目惚れしたんだよ。

次の週から学校へ行つたらさ、まさかいるなんて思わなかつたな。それも同じクラスなんて驚いたよ。

そのときはじめて小夜の名前を知つたんだつけ。

一カ円まどー一緒に話してこむうちに色々聞かせてくれたよね。

まずははじめに教えてくれたのは身体が弱いってことだったかな。健康そうに見えていたから嘘だと思って気にしなかった。

次に教えてくれたのは好きな食べ物で、甘い物全般だったかな。でも医者から制限されていって言ったよね。それで嫌いなものは苦いものだったね。でも毎日粉のお薬を泣きながら飲んでいたね。ここでようやく本当に身体が弱いってことを信じはじめたよ。スポーツは嫌いだったね。これは医者から禁止されていたらしくからあまり気にしていなかつたのかな？

本はよく読んでいたよね。きっと図書室に収まりきらないくらい読んだんじゃない？

なによりも一番[冗談で嘘みたいな話には驚かされたよ。だつて…………あと少しぐらりしか生きられないなんて言つんだからさ。

いくらい仲良くなつたからってさ、急に言われても信じられるはずないよ。

『薬で命を繋いでいるの。あと少しで死ぬのだから倒れるまで学校に行きたい』

なんて誰が信じるのさ。

その話をした帰りに一緒に帰つて、小夜が病院へ入つていくから信じるしかなかつたよ。薬で命を繋いでいるなんて[冗談だと思つてたんだ。

その次の日小夜が学校に来ていなかつたからも、学校を抜け出して小夜の家に向かつたんだよ。でも誰もいなくて、もしかして思つて病院に来たら小夜のお父さんを見つけたんだ。話を聞いたら今朝倒れつてお母さんから電話があつたつて。

特に部屋に入れてもらえたんだけども、いろんな機械が置いて

あつて、小夜にいろんな管が取り付けられてるの見て、立てなかつた……。

もつ田を覚まさない。

薬でどうにか生きている。

薬の投与をし縁にても一週間が限界

娘さんのしあわせを考えてあげて下さい。

そんな話聞きたくなんてなかつた。

小夜が倒れてから三日経つけれど、いまだに信じたくない自分がいるんだ。

本当は目をつむつているだけで、起きているんじゃないかつて。ねえ、小夜はどんな気持ちでの景色を見ていたの？もしかしてさ、あのとき僕があの場所にいなければ飛び降りてたりしたのかな？

あわが自分に向かう最後の鼻歌たつたりしたの？

考
え
出
し
た
ら
キ
リ
が
な
い
ん
だ
。

あ、もう時間が来たみたいだ。小夜さんのお母さんにお父さん、今まで本当にありがとうございました。たくさんお世話になりました。感謝してもしきれないです。何もしてあげられなくて本当にごめんなさい。僕は小夜さんに出来ないことがあって、いつもまで話しができて幸せでした。

バイバイ小夜、安らかにね。僕はときどきあの場所で待ってるから、いつでも来てよ。そしてさ、一緒にあの景色を見ようね。

ありがとう小夜。

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。

感想をいただけると幸いです。

また、この物語を書いた私自身、言葉足らずなのは承知しております。

それでも、どうしてもこの【しあわせの形】を知つてもらいたかつたです。

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2364ba/>

ユーサネイシア 【しあわせの形】

2012年1月5日23時45分発行